

経営部門

北海道二海郡八雲町

小栗 隆・小栗美笑子【酪農経営】

人・牛・大地の融合 —ロマン実らせた放牧酪農—



小栗さんご一家

平成19年度（第46回）農林水産祭天皇杯
第11回全国草地畜産コンクール農林水産大臣賞

小栗牧場は北海道南部の八雲町に立地し現在は畜産、施設野菜等の生産が盛んな地域である。八雲町は北海道酪農の発祥地といわれ、現在も道南の酪農の中心地として1万頭の乳牛が飼養されており、4.2万tの生乳生産が行われている。

小栗氏は昭和48年に帯広畜産大学卒業後就農、54年に父親から経営移譲を受けた後、種馬鈴薯、小麦等の畑作物を整理し、60年に酪農専業に転換した。当時の北海道酪農は濃厚飼料多給型の高泌乳生産が一般的で、小栗氏も高泌乳生産を経営目標にしたが、牛の疾病の多発や購入飼料費の増加のため、コスト高で高乳量にもかかわらず所得の伸び悩みや不安定さに加え、まるで「介護酪農」のような飼養管理に気苦労が絶えなかった。

こうした中で息子さんの一言だった「何故、放牧をしないのか」という発言に触発され、道内の放牧酪農の先進地視察、中でも浜中町の事例にふれ、平成9年放牧酪農への転換を決意し、本格的に放牧酪農へ転換した。放牧酪農への転換後には、経産牛1頭当たり乳量は9,000kg台から7,000kg台に減少したが、購入飼料費（3分の1）や診療衛生費（7分の1）等の大幅な生産費用の減少に伴って、生産コストの減少から舎飼い時代の「高コスト・低所得」経営から「低コスト・高所得」経営に脱皮した。

現状の経営は経営主夫婦と長男の3人の労力で草地約60haを基盤に経産牛45頭、育成牛20頭前後で年間所得1,370万円を確保している。

今日の「低コスト・高所得」経営を実現した技術的・経営的な評価点は、①固定的大放牧区による夏期間の昼夜放牧、②土壌診断に基づく草地の肥培等管理、③ふん尿処理と経営内循環利用、④飼料生産の単純化による省力生産と高品質サイレージの調製、⑤粗飼料の完全自給による購入飼料費の大幅削減、⑥プレミアム牛乳生産による高乳価の実現、⑦労力的なゆとりの確保と「低コスト・高所得」経営の達成、⑧放牧による省力化ならびにゆとりある経営の実現とチーズの加工・販売、⑨地域の酪農リーダーとしての活躍、⑩次世代への経営継承—等があげられる。

以上にみられるように、小栗牧場の放牧酪農の諸成果は北海道内にとどまらず、都府県の中山間地域や耕作放棄の進む地域の酪農振興の模範的事例といえる。

なお、小栗牧場の主要な経営成果を示すと以下のとおりである。

酪農部門所得	13,706千円	所得率	47.0%
家族労働力1人当たり所得	5,483千円	乳飼比	13.5%
経産牛1頭当たり所得	305千円		

▼牛の行動

搾乳が終わると牛たちは自然体で来た道を引き返し放牧地へ戻る



▼採草地

化学肥料を使用せずに栽培され、雑草も少なくバランスのとれた植生を維持している



▼放牧スタイル

牛たちは大牧区による自由採食（バイキング方式）で管理している



▼放牧地の管理

こまめな掃除刈りで、栄養価の高い短草利用を可能にしている



▼堆肥の散布

完熟した堆肥は秋の採草地に還元している



▼自給飼料の保管と給与

ロールアップサイレージは水捌けの良い場所に二段重ねで保管。場所や時期が記載され、効率よく牛に給与されている

